
同じ世界で

sand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ世界で

【Nコード】

N9977A

【作者名】

s a n d

【あらすじ】

異端児と呼ばれる者たちの真実。私はそれが知りたかった。だから私は真実を探した。彼らのことが知りたかったから、そして自分自身のことも……。

第0話

「君はなぜ異端児が生まれるんだと思う？」

私はまだわからなかったんだ。だから私は真実が知りたくなつたんだ。彼らの事を、そして自分自身のことを・・・。

~~~~~\*~~~~~\*~~~~~\*~~~~~

この世界には人間としては扱われない人たちがいる。その人たちは異端児と呼ばれている。なぜ異端児と呼ばれているのか？それは人とは違うから。見た目が違うというわけではないのだけれどその人たちは普通の人より数倍運動能力が良かったりと人よりも優れている人たちなのである。見分けるためには、腕に番号とマークのような刺青が入っているのが目印。そしてその者たちは皆若く、子どもばかりである。異端児は皆永くは生きられないかららしい。このようなことからこの若者達は異端児と呼ばれている。だが、誰もが異端児の真実を知らない。みんな噂でしかないのだ。

異端児と呼ばれていながらも彼らは人々とともに世界を共存してきた。ある事件が起こるまでは。異端児が人を殺した事件。それがきっかけのように異端児は人を襲うようになっていった。そして異端児は人から恐れられるようになっていった。もう共存など出来はしない。人は皆異端児を追いやり、そのため異端児も人を憎む者が増えていったからだ。それからずっと人と異端児のいがみ合いが始まっていった。

## 第1話

「はあ、また異端児の事件だよ。」

雑誌を見ている少女は言った。

「私たちには関係ないことでしょ？ここは安全なんだし。」

そう、ここは警備が万全な学校なのである。そんな事件など起こるはずがない。

「そうなんだけどさあ。やっぱり怖いじゃん。見た目は全然私たちと変わりないんだよ？警備が万全とはいえいつ襲ってくるのか分からないよ。ティナだってそう思わない？」

私の友達シアは毎日こんなことを言ってる。確かに私だって異端児は怖い。だって色んな噂とか流れているし、毎日のように異端児がらみのニュースがテレビやラジオで流れているんだから。しかもそのほとんどが人を襲ったという内容だったり殺人事件だったり。．．。けれど、この学校のことは信頼している。なんせこの学校はお金持ちの子どもばかりが集うようなそんな学校だからいろんな所にお金をかけている。もちろん警備に使うお金も半端ない。だから多分ここが世界で一番安全ともいえるようなところだろう。

「私はこの学校を信頼しているから。本当は私なんか通えるようなところじゃないんだけどね。全部マルクス夫妻のおかげだよ。両親のいない私を引き取ってくれてしかも本当の娘のように育ててくれているんだもん。私にとっても2人は本当に大切な家族だよ。」

「そつかあ、ティナって確か少し前まで孤児院にいたんだよね？」

「うん．．．。私が10歳の時孤児院に入ったらいいんだけどそれより前の記憶が無くて両親のこととか自分の名前ですら覚えていなかったの。そして私が14歳になってマルクス夫妻に引き取られたってわけ。」

「え？じゃあティナって名前はどうしたの？マルクスさんにつけてもらったの？」

「うん。孤児院に引き取られたときに私が持っていたペンダントにそう書いてあったんだって。」

「へえ、そうだったんだあ。いろいろ大変なんだね、ティナって。自分の記憶を取り戻したいか思ったりしないの？」

「そう考えたことはあまりないかも。今すごく幸せだから。」

これは本当のことだ。今私はすごく幸せだと思っている。マルクス夫妻はとても裕福な家庭であるから何一つ困ることがない。それだけではなく本当にマルクス夫妻は私を娘として迎え入れてくれた。何よりもそれが一番嬉しいことだった。昔のことは全く気にならないというわけではないのだけれども記憶を取り戻そうとは考えていない。それで困ることはないのだから。

「あつ、シアそろそろ授業始まるよ。」

「ねえ本当に異端児こないよね？」

（まだ言ってる・・・）

「もうそんなに心配しなくてもいいでしょ？そんなこと言ったら本当に来ちゃうよ？」

本当にそのとおりだ。こんなに言われたら私まで心配になってくる。でも私たちには関係の無いことだ。そんな心配していても無駄なことだろう。

「うん、そうだね。前向きに考えなきゃだね。」

そうして2人は教室へと入っていった。

## 第2話

「おいつ、アルフ準備はいいか？」

四つの影の中の一人が問い掛けた。

それに答えたのは一番背が高い、アルフと呼ばれた男だ。

「ああ。大丈夫だ。」

「ねえ本当に行くのか、レスト？」

今度は一人心配そうに問い掛ける。

「ここまで来たんだ当たり前だろう？」

最初に声を出した者の名前はレストというらしい。

「そうよこんな所で引き下がったりしたら今までの私たちの苦労が水の泡でしょう？」

最後の一人は少女のようだ。

ティナの通う学校の外でこの4人は何やら作戦を立てている。あまり良いことではないだろう。その面持ちは皆深刻だ。

「俺達にはもうこんなことしか出来ないんだ。あの場所を抜け出してから俺達は仲間を見捨てることしか出来なかったんだ。だからもうやるしかないだろう？ ジェイ」

「うん・・・やっどこまで来たんだもんね。それに目の前でもう誰も傷ついて欲しくない。」

一番心配そうに話していた一人、ジェイは右手を見ながらまるで今まで合ったこと思っているようにこう言った。その右手には何やら番号と何かマークのようなものの刺青が施されている。

「これは一発勝負！ 失敗は許されないわよ。この作戦を絶対に成功させなきゃ！」

拳を両手で作り自分自身にも言い聞かせるように少女は意気込んだ。

「ロゼの言つとおりだ。この作戦を成功させて俺達異端児の事を知ってもらわなくてはいけない。たとえ俺達が犠牲になったとしても。」

「ああ。」

「うん。」

「ええ。」

4人はそれぞれ覚悟を決めたように返事をした。

「じゃあみんな行くぞ！」

レストの声を合図に皆各自準備を始めた。銃やナイフなど凶器となる道具からありとあらゆる物を用意し、4人は今、大勢の人がそしてティナが通う、学校へと足を踏み入れていこうとするのであった。

レストとジェイ、アルフとロゼで二手に分かれ行動していく。

「じゃあ後でまた落ち合おうね。」

ロゼはそう言ってアルフと共にひとりとして警備員のいるところへと向かっていった。

「俺達も行くか。」

「うん。」

二人がおとりとなっているうちに校内へ侵入しなくてはならない。例えここの警備がすごいと言っても何かしら欠点という場所くらいある。今まで長い期間をかけてこの学校のことを調べてきたんだ。それに運動能力なら普通の人よりも数段優れている。何も心配することはないだろう。

そしてレストとジェイの二人は警備の一番薄くなっている場所へと走っていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9977a/>

---

同じ世界で

2010年10月9日02時27分発行